

令和5年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立泉丘中学校 教諭 飛田 なつ美

- 1 派遣期日 令和5年11月17日（金）
- 2 派遣先 第65回関東甲信越音楽教育研究会 長野大会（オンライン）

3 研修内容

(1) 全体会

研究テーマは、「発見！音楽のオモシロさ！～音楽科における個別最適な学びと協働的な学びを通して～」で、長野県では、「子どもと共に創る授業」、「子どもに発し子どもに還る授業研究」を大切にしている。子どもたちは教師と共に、さまざまな音楽と出会い、「音楽のオモシロさ」を見つけ、楽しみ、味わうことが、生涯にわたって音楽を愛好し、自分の心の友としてたくましく、豊かに生きていくことにつながっていくと考えている。また、「音楽のオモシロさ」に出会ったときの感動を味わったり、「音楽のオモシロさ」を求めて、さまざまな工夫を凝らしながら、とことん向き合ったりすることができるような授業を創造していくことを大切にしている。そのために、学習指導要領に示された教科等の特質に応じた「見方・考え方」を踏まえ、「子ども」「教材」「学習の課程」の視点から教材研究を充実させている。

今大会では、「確かな教材研究」に視点をおき、次のような生徒の姿を思い描いて授業実践が行われた。

- どのような出会いから、生徒は「音楽のオモシロさ」を感じていくのか。
- どんな学習が生徒の感性や好奇心を刺激し、主体的に「音楽のオモシロさ」を追究することに繋がっていくのか。
- 存分に音楽を楽しんだり、じっくり自分の足跡を振り返ったりする中で、どうやって「音楽のオモシロさ」を自分のものとしていくのか。

公開授業では、「音楽のオモシロさ」を追い求め、生徒自ら「個別最適な学び」や「協働的な学び」を取り入れたり、組み合わせたりしながら学習を深めていけるような授業を展開していた。

(2) 公開授業

① 公開授業Ⅰ 創作分野

- ・発表校：飯綱町立飯綱中学校 第3学年
- ・題材名：駅メロを創ろう パート2
～美しい飯綱の四季を感じ取り、牟礼駅の四季にあった駅メロを創ろう～
- ・授業者 稲垣 典子 先生
- ・〔オモシロさの捉え〕

タブレット端末を用いて、牟礼駅で実際に流す「駅メロ」を創作する学習であった。たった10秒の中で、反復・変化などの構成に着目して牟礼駅の自分のイメージを音楽で表すことにより、生活や社会、人々の営みと音楽との関わりが実感できる学習の展開であった。

- ・〔個別最適な学びと協働的な学習〕

本題材の学習問題が「どのようにすれば牟礼駅らしさを表すことができるのだろうか」であった。似たようなイメージの「駅メロ」をつくる生徒同士で班を組んだことで、互いにに関わり合いながら問題解決に向けて活動することができた。自分が創作した「駅メロ」を互いに聴き合い、アドバイスをすることで、自分が表現したい「駅メロ」をより良くするために試行錯誤し、学びを深めることができると実感した。また、1人1台のタブレット端末を活用することで、創作した曲を再生したり、すぐに修正し

たりすることができた。そのため、生徒が自分のペースで納得のいくまで何度も作り直して試すことができるため、個別最適な学びを促すことができると感じた。

このような活動の中で、授業者は、直感的に音を旋律にしていだけでなく、構成を考えると曲にまとまりが出てくることを生徒が自ら気付けるようしていた。様々な構成や旋律を試すことを通して、友達から学んだことや、自分の考えが深まったことを生徒自身が実感できると感じた。

② 公開授業Ⅱ 鑑賞分野

- ・発表校：長野市立櫻ヶ岡中学校 第2学年
- ・題材名：変わらないけど変わっている？反復の中で起こる『ボレロ』の変化を探ろう！
- ・授業者：海野 妙 先生
- ・〔オモシロさの捉え〕

リズムと二つの主題が反復・変化しながら進行する『ボレロ』を、「構成」を思考・判断のよりどころとして聴き深めていく学習であった。「同じ旋律やリズムの何がどう変わっていくのだろうか」という学習問題に対して、音楽的な見方・考え方を働かせながら曲の仕掛けを探っていくために、タブレット端末を用いて学習を進めていた。その中で、友達と一緒に曲を聴いたり、個人で聴きたい部分を聴いたりした後に、気付いたことや感じ取ったことを全体で共有することで、楽器の音色や強弱など、構成の視点から様々な要素の変化を捉えることができると実感した。

- ・〔個別最適な学びと協働的な学習〕

学習問題の解決のために、各自がタブレット端末を用いて、自分が気になった箇所を聴きたいタイミングで聴けるようにしたり、友達と意見を共有しながら聴きたい生徒のために音源を囲んで聴けるようにしたりと環境を整えていた。また、複数の音源を聴き比べることができるよう音源を複数用意したり、『ボレロ』の楽譜を用意したりしていた。このように、自分に合った方法を自分で選択することで、問題の解決に向かうことができると感じた。

このような活動の中で、授業者は個々の気付きに共感したり、知覚したことと感受したことの関わりを問い返したりしていた。生徒の考えや新たな問いを把握し、全体共有していくことで、深い学びにつながっていくと感じた。

4 感想

生徒の実態を丁寧に把握した「確かな教材研究」は、生徒が主体的に学習課題を追究することに繋がること、学習題材にあった学習形態・学習環境を整えることが、生徒の深い学びに結びつくと感じた。また、公開授業を参観し、生徒が自分の思いを音や言葉で表現できたり、考えを他者に伝えたりすることができた時の生徒の様子が、とても生き生きとしていた。さらに、学習問題について深く追究しようとしていたのが印象的だった。毎時間の学習のゴールが明確であることや、授業者の的確な指示、学習支援の方法を複数用意しておくことが、生徒の活動を活発にさせると改めて感じた。活動する姿を見て、音楽を存分に楽しみ、「音楽のオモシロさ」を自分のものとしているようだと思った。そんな授業展開をしていきたい。そして、音楽の学習を通して、生涯にわたって音楽を愛好し、自分の心の友としてたくましく、豊かに生きていく心を育てていきたい。そのために、確かな教材研究を丁寧にしていきたい、授業力を向上させていきたい。